

《すずらん抄》

折口信夫の冷泉為恭

——「山越しの阿弥陀像の画因」の序——

辻 憲 男

折口信夫の評論「山越しの阿弥陀像の画因」は昭和十九年（一九四四）七月に、雑誌「八雲」第三輯に発表された。主題は山越し阿弥陀像の「由来」——源信僧都の日想観に関わる来迎図の伝承であるが、同時にこれが前年九月に刊行した小説『死者の書』の創作動機と主題を明かした自解の文章になっている。

その釈迢空著『死者の書』の初版は青磁社刊。奥付には「著者 折口信夫^{ヨリグチシノブ}」とある。また再販の釈迢空著『死者の書』は昭和二十二年七月、角川書店刊。この戦後版では小説のあとに、右の評論を「山越しの弥陀」と改題して併録する。折口信夫の名は見えない。両版ともに目次はなく、口絵に金戒光明寺本の山越し阿弥陀図の写真版を掲げる。以下、本稿での引用は便宜により旧版全集第二十四巻・第二十七巻によるが、ルビ等を適宜省略したところがある。

「山越しの阿弥陀像の画因」（以下、「画因」論と略称することがある）は、およそ四つの話題から成る。即ち『死者の書』の構想と中将姫、称讚浄土経と阿弥陀信仰、二上山を仰ぎ見る源信僧都の誕生地、そして日を拝む民俗信仰である。折口は冒頭一行目に「極楽の東門に 向ふ難波の西の海……」の一ふしを掲げ（謡曲『弱法師』、後出）、

次に渡来文化の変容の例として「日本人の考へた山越しの阿弥陀像」を挙げる。そして論の前置きに、不思議な因縁を思わせる絵画にまつわる逸話を一つ紹介する。それは今も大倉集古館に所蔵する冷泉れいぜいためづかみ為恭筆の阿弥陀来迎図が、関東大震災の前に一紳士の頼みによって別の場所に出し置かれ、奇跡のように災難をのがれたという事実譚である。曰く、昭和の初め頃に折口は「山越しの弥陀をめぐる不思議」というような表題の、大倉象馬の「美術雑誌か何か」の抜き刷りを読んだ。大倉喜八郎が何の気なしに買って置いたその絵は、為恭が紀州根来潜居の間に描いたもので、そのあと旅に出た大和で浪士のために落命したといういわれのある一枚であった。

その絵は「山越阿弥陀図」、文久三年（一八六三）作、絹本着色、軸装一幅、一七三・五×九〇・〇cmである（最近の特別展図録『大倉集古館の名宝』二〇〇七年による）。また大倉象馬の文献というのは『大倉集古館所蔵山越阿弥陀如来図を繞る不思議の出来事』と題する小冊子に収める一篇である。その内題では「如来」と「図」の間に「の」一字がある。本文は全12頁、文中の年記に昭和四年五月と見える。¹⁾

その「出来事」の大略は折口の記述するとおりであるが、以下私に若干の補足を加える。——そもそも為恭が祈願をこめた仏画でありながら、一年後にあたり非命に斃れたという因縁がある。と言つても、絵は峰の松原や滝や紅葉の前景など、「大和絵の常」のさまである。而して大震災はそれより六十年後の大正十二年（一九二三）九月である。災火を免れたのはこの絵の靈験のゆえであり、その誰とも知られぬ紳士の恩徳によるのである。さて六年後の昭和四年に集古館に現れた恩人は篤信家の粂山半三郎であった。奇しくもまた為恭の祥月命日の五月五日であったという。阿弥陀図は美術品である以上に、神秘不思議の信仰の対象となった——。折口はかく結ぶ、「集古館の山越しの阿弥陀像が、一つの不思議を呼び起したといふよりも、あの弥陀来迎図を廻つて、日本人が持つて来た神秘の源頭が、震火の動揺に刺激せられて、目立つて来たといふ方が、ほんたうらしい」と。しかもそのような神秘感はより古くは、しばしば宗教心を刺激したことがあったし、新しくは私の「中将姫の物語」が適例である、

云々と。

ところでこの『奇蹟』の間の大正十四年に、逸木盛照の『冷泉為恭』なる一書が刊行されている（中外出版）。絵が災火を免れたことには触れないが、その図題及び識語については、

山越阿弥陀如来図 一幅 大倉集古館蔵

「依大行満願海大悲大阿闍梨貴命奉図写粉河寺御池書院訖／維時文久三年癸亥夏四月心蓮光阿慎記」〔願字脱、今補〕

であると記す。同館には文久三年春三月の「仏頂尊勝陀羅尼神明仏陀降臨曼荼羅 一幅」も並んで収蔵する（前掲図録にも載る）。その他、為恭が粉河寺の願海のために描いたものは多数にのぼる。願海と為恭の親交はおよそ十年来、ともに京に在った頃からの関係であったと推測せられる。

逸木氏によると、為恭周忌の大正十三年を迎える二、三年の間は、関係の展観や催事が頻りに行われた。とすれば榎山氏の集古館来訪は偶々であつたわけではなく、また事後の「何人なる哉」の館の探索方も些か迂闊に過ぎたのではないか。「出来事」の神秘化が疑われもするのである。さても、榎山氏架蔵の遺墨類は震災で悉く失つた由。集古館三棟の仏教美術の優品も全焼したし、大きな奇蹟というものは起こらなかつたのである。（ちなみに逸木著書の装幀考案及び題簽は吉川靈華によるとある。靈華は折口も例に引く当代大和絵の大家であつた）

かくして折口の巧みな導入は、以降の叙述の神秘性を増す効果があつたであろう。稿者はその作用を疑うつもりはないが、ここに思い見られるのは、ほかならぬ太平洋戦争末期のものはや絶望的な情勢である。苛烈な戦時下に在つて、折口が二十年前の奇蹟談を思い出し、これに密かに重ねたであろう悲愴な祈願のことである。

凡そ日本文化なるもの「我が国生得のもの」が、今しも災禍のごとく滅亡の危機に瀕している。確かにそこに「画

「因」論の執筆動機があった。それは「^{コレ}之が書きたくなつた、私一個の事情」であつた。同時にまた、折口個人の「心願」に関わる事情でもあつた。

折口自身の年譜を見ると、昭和十九年五月の旅で檀原神宮から当麻寺、吉野へと巡つたとある。「画因」論に取りかかる時期であり、大串純夫の研究（後出）もこの時初めて知つた。また論の結び近くに記す、高田から当麻へ向かう時の二上山落日の光景も、近くはこの旅行の時の印象が持続したものとと思われる。ところが当の七月になつて、前年九月に応召していた藤井春洋の部隊が、千葉県柏を経て硫黄島へ移動した。「春洋年譜」によると、横浜から八丈島へ向かつたが、先発船が沈没したため、急に予定を変えて、到着したのが硫黄島であつたという（折口春洋の歌集『鶴が音』付載）。そして同月の下旬に折口は春洋を養嗣子として入籍した（保証人柳田国男ほか）。春洋は数え三十八歳。辛くも宿願を果たした。而るに翌二十年三月に至つて硫黄島全滅の報がもたらされた。

稿者は以前、為恭に関する研究文献が大正後期以降夥しい数にのぼるのに驚いたことがある。危機の淵を生きた為恭の無惨が、何か両大戦間の時代相と通じるのであろうか。先に折口も一言、二十年も前の根来・粉川の旅の記憶を記していた。「仰いだ風猛山^{カザラギ}」帯の峰の松原」を追想し、「何かせつない気がした」とある。折口の「画因」論一篇もまた、同じような戦局終末期の暗澹を感じ取っていたのかと思われるのである。（未完）

注

- (1) 大倉糸馬の寄贈本が国立国会図書館デジタルコレクションの中にあり、稿者はその送信サービスにより閲覧複写することができた（二〇一五年三月、於大阪府立中央図書館）。冊子は頁付32頁で、大倉稿の他に如來写真一葉と序文、糺山半三郎・村松梢風・逸木盛照の文章を収める。なお為恭についての参考文献

として、中村溪男編『日本の美術 No.261 冷泉為恭と復古大和絵』一九八八年二月を参照した。また早い時期の概説書としては、藤岡作太郎『近世絵画史』がある（明治三十六年初版、昭和五十八年新訂版）。

- (2) 昭和十九年七月にサイパン島玉砕。その夏の間、春洋は多くの兵士らを戦地へ見送った。『鶴が音』の中の一首に「知り人の戦死の噂 あひ続けて聞え来るなり。洋のはてより」がある。同書は昭和二十八年刊、迢空の「追ひ書き」を付す。稿者云、折口には、恰も為恭と春洋の運命が暗く重なるごとくに思われたのでもあろうか。——為恭は「心願を持つて」描いた。非命の絵師の仏画が焼失を免れたように、せめても春洋の身が戦火を免れぬものか。一紳士が奇蹟を起こしたように、わが「心願」が彼に幸いをもたらしてくれぬか。『死者の書』は滅亡の予見ではない、あれは生命復活の書だ。「おれは活きた」。わが滋賀津彦の身は滅びようとも、不思議の山越し阿弥陀はわれらの往生を今にも来迎し給うであらう——。

(二〇一八年十一月未定稿の第一節。二〇二三年五月改修)

(神戸親和女子大学名誉教授)